

「盲人たちへ」

ルカの福音書 6:39~49

はじめに

前回に引き続き、今日の箇所もまた「～しなさい」というイエシュアの教え、戒め、すなわち絶対的権威者としての神の命令が記されています。ただ前回と大きく異なっていることは、今日の内容のほとんどすべてが「たとえ」を用いて語られている、ということです。今日の箇所は短いながらもそのような多くのたとえ話が綴られています。この「たとえ」を用いて語られることについて、イエシュアは弟子たちにこのように言われました。

ルカの福音書【新改訳 2017】

8:10 イエスは（弟子たちに）言われた。「あなたがたには神の国の奥義を知ることが許されていますが、ほかの人たちには、たとえで話します。『彼らが見ていても見ることがなく、聞いていても悟ることがないように』するためです。

このように、イエシュアのたとえはすべて「神の国の奥義」なのです。奥義とは許された者、選ばれた者だけが知ることができる秘密、隠されているもの、まさに神秘と呼ばれるものです。今の時代が終わり、やがて到来する新しい時代、新しい世界「神の国」についての情報、知識、神のご計画がイエシュアのたとえには隠されている、秘められているのです。今日その奥義を、その解き明かしを聞くことが許されている、選ばれている私たちは、なんと幸いなことでしょうか。では早速読み進んでまいりましょう。主の御名を呼び、大いなる神のご計画に、私たちの霊の目が、耳が開かれますように。シェーム・イエシュア！

1. 二人の盲人

ルカの福音書【新改訳 2017】

6:39 イエスはまた、彼らに一つのたとえを話された。「盲人が盲人を案内できるでしょうか。二人とも穴に落ち込まないでしょうか。」

このたとえにある二人の盲人とは、やがて「神の国」に入るべく選ばれた人でありながら、今はその事実に気づいていない、知らない、理解していない、知識的盲目状態の人を表しています。その一人は、アブラハムの子孫、神の契約の民であるイスラエルです。そしてもう一人の盲人は、私たちクリスチャンとも呼ばれる教会です。この二人の盲人、イスラエルと教会はそれぞれ「神の国」についての重要な事実がまだ見えていません。まずイスラエルが見えていないもの、それはイエシュア・ハマシア、イエス・キリストとも呼ばれるこの御方が神の御子メシアであることが見えていません。そのため今日も彼らの多くはイエシュアを信じる私たち教会を否定し、拒絶し続けています。そして一方私たち教会は、彼らイスラエルの存在の神のご計画におけるその重要性が見えていません。私たちも含め今日も多くの教会が、イスラエルに対して語られた聖書の御言葉、神の約束の御言葉を自分たち教会に語られたものとして理解し、教

え広め、イスラエルを軽視、あるいは無視、否定し続けています。このようにイスラエルと教会という、この二人の盲人は何が見えていないのかというと、お互いがお互いを見えていない、つまり神のご計画におけるお互いの存在価値がお互いに見えていないのです。その結果、この二人の盲人は、まさに穴に落ち込んだ、墮落した、悪い状態、状況にあるということがここにたとえられているのです。

2. 師と弟子

ルカの福音書【新改訳 2017】

6:40 弟子は師以上の者ではありません。しかし、だれでも十分に訓練を受ければ、自分の師のようにはなります。

先ほどのたとえは、盲人が盲人を導くというものでしたが、ここではそれが師と弟子という形に言い換えられています。この師と弟子という関係は、親と子、王と民など同じように、お互いの存在があってこそ成り立つものです。弟子のいない師は師ではありません。逆もまた然りです。そしてこの両者はやがて後には同じようになるという結論となっています。「十分に訓練を受ければ」という箇所に使われているヘブル語シャーレーム(רוּץ)は本来、努力や修練という意味の言葉ではなく時間の経過、旅の行程によってやがて「完全になる、完成する」という意味の言葉です(創世記 15:16)。イスラエルと教会は、お互いについての理解が欠落し、見えていないのでどちらもある部分において師であり、他のある部分において弟子でもあるということになります。しかしやがてこの両者は互いの価値を理解し、一つとなる日が来ます。それが「神の国」の到来する日です。こう預言されているとおりです。

エレミヤ書【新改訳 2017】

31:33 これらの日の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうである——【主】のことば——。わたしは、わたしの律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

31:34 彼らはもはや、それぞれ隣人に、あるいはそれぞれ兄弟に、『【主】を知れ』と言って教えることはない。彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るようになるからだ——【主】のことば——。わたしが彼らの不義を赦し、もはや彼らの罪を思い起こさないからだ。」

今はまだ神である主について、その御心、ご計画について盲目となっているイスラエルとその「隣人」である私たち教会ですが、やがて「これらの日の後に」ともに神の御前に一つの民となる時「神の国」がシャーレーム「完成する」その日、互いの目は開かれ、この預言は成就します。盲人の目を開けるのは盲人の努力や修練によるものではありません。それは神の御子メシアであられるイエシュアだけが行うことができる御業です。そのイエシュアが「神の国」をお建てになるその日、その時、それは完成するのです。イエシュアのたとえられた「だれでも十分に訓練を受ければ、自分の師のようにはなります。」とはそのような意味を秘めた、イエシュアの約束の御言葉なのです。

3. 梁とちり

ルカの福音書【新改訳 2017】

6:41 あなたは、兄弟の目にあるちりは見えるのに、自分自身の目にある梁には、なぜ気がつかないのですか。

6:42 あなた自身、自分の目にある梁が見えていないのに、兄弟に対して『兄弟、あなたの目のちりを取り除かせてください』と、どうして言えるのですか。偽善者よ、まず自分の目から梁を取り除きなさい。そうすれば、兄弟の目のちりがはっきり見えるようになって、取り除くことができます。

このたとえは神のご計画におけるイスラエルの重要性を理解、認識していなければ読み解くことができません。それどころかただの人間関係における道徳的な教えに成り下がってしまいます。どうか思い込みや偏見、先入観を取り除いてよく聞いてください。このたとえにも同じく二人の人が登場します。「あなた」とその「兄弟」がそれぞれです。この「あなた」と「兄弟」それぞれの目の中にあるものが違います。「あなた」の目には「梁」があります。これをヘブル語でコーラー(קוֹרָה)といい、本来は家の屋根の下、家の中全体を意味する言葉です。

創世記【新改訳 2017】

19:8 お願いですから。私には、まだ男を知らない娘が二人います。娘たちをあなたがたのところに連れて来ますから、好きなようにしてください。けれども、あの人たちには何もしないでください。あの人たちは、私の屋根の下に身を寄せたのですから。」

これは天からの火によって滅ぼされた罪の町、ソドムにいたただ一人の義人ロトが語ったものです。主は彼を救うためにその家「屋根の下」コーラーに御使いを遣わされました。ですから「梁」と訳されたコーラーには本来、「御使いによって滅びを免れる人の家」という意味があるのです。このロトという人はアブラハムの甥、親戚ですが、その家から別れ出てモアブ人やアモン人といった異邦人の祖となりました。つまりこの「梁」コーラーには、主が遣わされた御使いによって救われる異邦人すなわち私たち教会の存在が秘められているのです。しかしイエシュアは「あなた」はそれに「気がつかない」「梁が見えていない」と言っておられるのです。つまりここでイエシュアがたとえておられる「あなた」とは、教会に対する神のご計画が見えていないイスラエルのことを指しているのです。

では「あなた」すなわちイスラエルが見ている「兄弟…の目のちり」とは何でしょうか。ここにはヘブル語では本来「占い」という意味のケセム(קֶסֶם)が使われています。占いとは異教の神々や悪霊に伺いを立てる偶像礼拝のことです。今日でもユダヤ人とも呼ばれる彼らイスラエルは、私たち教会を悪霊に仕える者、偶像礼拝者として見ています。その事実が「兄弟の目にあるちりは見える」というたとえに表されているのです。

そこでイエシュアは「あなた」すなわちイスラエルを、自分たちは正しいと思い込んでいる「偽善者」と呼び、「自分の目から梁を取り除きなさい」と命じておられます。しかし考えてもみてください。見えていない、気づいていないものを取り除くことが果たしてできるのでしょうか。しかも彼らはみな「盲人」なのです。ですからこのイエシュアの命令は「あなた」すなわちイスラエルに対して自分の力でこれをせよと命じておられるものではなく、絶対的権威者としての神の御言葉、御心のとおりにならず成就、実現す

るという意味をもったもの、つまり神ご自身が責任をもって必ずそのことを成し遂げるといふ意味の表現なのです。前回もお伝えしましたが、この天地宇宙で神の命令に逆らえるものはいません。もしそんなものがいたら、それは神と同等かそれ以上の存在であると。他に神はいないとお伝えしました。ですから「**自分の目から梁を取り除きなさい**」とは、イスラエルが見えていない、気づいていない、教会に対する神の救いのご計画により、「**梁**」ロトの家、すなわち教会が、御使いたちによって、すなわち主の命令によって「この地上から取り除かれる」といふ事実です。こう預言されているとおりです。

I テサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

4:16 **すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、**

4:17 **それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。**

イエシュアの「空中再臨、教会の携挙」と呼ばれる、この事実が成就すると、私たち教会はまさにこの地上から、イスラエルの目の前から取り除かれ、見えなくなります。これに伴い、イスラエルの民、ユダヤ人たちは自分たちの盲目さ、誤りに気づくのです。それが「**そうすれば、兄弟の目のちりがはっきり見えるようになって、取り除くことができます。**」というたとえに秘められた、神のご計画「神の国の奥義」なのです。

4. なぜあなたがたは

ルカの福音書【新改訳 2017】

6:43 **良い木が悪い実を結ぶことはなく、悪い木が良い実を結ぶこともありません。**

6:44 **木はそれぞれ、その実によって分かります。茨からいちじくを採ることはなく、野ばらからぶどうを摘むこともありません。**

6:45 **良い人は、その心の良い倉から良い物を出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を出します。人の口は、心に満ちていることを話すからです。**

6:46 **なぜあなたがたは、わたしを『主よ、主よ』と呼びながら、わたしの言うことを行わないのですか。**

「なぜあなたがたは」と、ここでイエシュアはここまでたとえてこられた二人の盲人、師と弟子、あなたと兄弟の両方に対して、すなわちイスラエルと教会に対して問うておられます。「**なぜあなたがたは、わたしを『主よ、主よ』と呼びながら、わたしの言うことを行わないのですか**」と（ちなみにこの「なぜ…」は疑問、質問の意味ではなく悲嘆、心痛、悔やみの表現です）。その理由はここにたとえられているとおり、イスラエルも教会もどちらも盲人であり、未熟な弟子であり、偽善者だからです。「**悪い実を結ぶ…悪い木**」「**茨…野ばら**」であり、「**悪い人**」すなわちどちらも罪人だからです。アダムから始まった罪は全人類に及び、それはたとえイスラエルであろうと教会であろうと例外ではありません。ここでイエシュアは人が自分の力で自分を神の御前に正しくきよい者となることは絶対にできないことを強調しておられ、それはただ神の御業によるのだと述べておられるのです。そしてそれは茨をいちじくの木に、野ばら

をぶどうの木に造り変える、つまり初めから全く新しく創造することであり、それは人が死に、復活することによってのみ可能となることをも示唆しているのです。すなわちこう言われているとおりです。

ヨハネの福音書【新改訳 2017】

3:3 イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに言います。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」

イエシュアのこの御言葉はたとえではありません。つまりその言葉どおりの意味です。人は、新しく生まれなければ、神の国を見る、そこに入り、そこに住む者としてふさわしく変わることはできないのです。しかし死んで自力で生き返れる者などいません。ましてやもう二度と死ぬことのない永遠の肉体をもって生き返るなど…。すべてはただ神の御力、御業によるものなのです。この真理をしっかりと踏まえた上で次のたとえを読んでみましょう。

5. 家を建てた人

ルカの福音書【新改訳 2017】

6:47 わたしのもとに来て、わたしのことばを聞き、それを行う人がみな、どんな人に似ているか、あなたがたに示しましょう。

6:48 その人は、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、家を建てた人に似ています。洪水になり、川の水がその家に押し寄せても、しっかり建てられていたので、びくともしませんでした。

6:49 しかし、聞いても行わない人は、土台なしで地面に家を建てた人に似ています。川の水が押し寄せると、家はすぐに倒れてしまい、その壊れ方はひどいものでした。」

このたとえにある「地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、家を建てた人」とはどのような人でしょう。これを理解するためには聖書の記述の一つの特性を知る必要があります。それは対句、並行法、パラレリズムとも呼ばれるもので、ある一つの内容や目的を別の言葉や物事に何度も言い換え、置き換えて強調したり、補足説明するための表現方法が聖書の随所に見られるのです。今日のイエシュアの「二人の盲人」「師と弟子」「あなたと兄弟」のたとえなどはまさにその顕著な例と言えます。では「地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、家を建てた人」とはどのような人でしょう。それは「わたしのもとに来て、わたしのことばを聞き、それを行う人」です。つまり「わたしのもとに来て」という描写が「地面を深く掘り下げ」と言い換えられ、「わたしのことばを聞」とは「岩の上に土台を据え」と言い換えられているのです。

しかし説明がこれだけでは私たちはまた自分の力でどうにかしなければと考えてしまいます。秘められた「神の国の奥義」を知るには聖書の原語にしてイスラエルの言語であるヘブル語の知識が必要です。ここで「地面を深く掘り下げ」という箇所に使われているハーファル(רָפַר)は本来、井戸を「掘る」ことを意味する言葉です。この最初の言及、ハーファルが聖書で最初に使われたのは以下の記述です。

創世記【新改訳 2017】

21:29 アビメレクはアブラハムに言った。「今、あなたが別にしたこの七匹の雌の子羊は、何のためのものですか。」

21:30 アブラハムは言った。「私がこの井戸を掘ったという証拠になるように、七匹の雌の子羊を私の手から受け取ってください。」

21:31 それゆえ、その場所はベエル・シェバと呼ばれた。彼ら二人がそこで誓ったからである。

21:32 彼らはベエル・シェバで契約を結んだ。

これはイスラエルの父祖アブラハムとペリシテ人の王アビメレクが契約、平和条約を結んだという記事です。このようにアブラハムのハーファル「掘った」井戸が平和の絆、決して争わないという誓いの象徴となっています。ですから「わたしのもとに来て」、すなわち「地面を深く掘り下げ」る人とは、イエシュアのみもとに集められ、イエシュアとアブラハムの子孫であるイスラエルの民が、国として、民族的に平和の絆、誓いで結ばれるという事実を指し示しているのです。また「岩の上に土台を据えて」という箇所に使われているヤーサド(טֹד)という言葉も本来は、建設や建築ではなく「建国」すなわち国が始まることを意味する言葉なのです(出エジプト記 9:18)。このように神のご計画とは、神と神に選ばれた一人ひとりとの個人的な関わりだけに現れるものではなく、王としての神とその民、その国民という関わりにおいて果たされる、いわば国家的プロジェクトでもあるということがここには示されているのです。すなわちそれは神の御子メシアであるイエシュアを王とし、イスラエルの民が国家として再興することを指し示しているのです。これ以外の方法で、これを無視、拒絶した方法では、どのような家、どのような国家もみな滅び去ります。それが「土台なしで地面に家を建てた人」としてたとえられています。つまり今のこの世界は、この社会はすべて滅び去るということがここに示されているのです。

このように、神である主は、この地上に、全く新しい国を興そうとしておられるのです。それが「神の国」であり、その奥義、ご計画について今日もお伝えしました。イエシュアのたとえば、いやイエシュアのすべての御言葉は、聖書全体はこの「神の国」を指し示しているのです。どうか聖書を、人生の教科書などと、ただの道徳的な教え、人生成功の秘訣などと混同しないようにお願いします。聖書はただ「神の国」を指し示す、神の計画書であるとお考え下さい。そしてその目的は、読み手に「神の国」に目をとめさせ、これを待ち望ませるためのものであることを覚えてください。

最後に、今日の内容を聞いて、自分がいかに盲目であるかと思われた方に言います。どうか落ち込まないようになしてください。私はあなたを落ち込ませ、責めるためにこれらを語ったのではありません。たとえばあなたが盲人であろうと、無知であろうと、愚かな罪人であろうと、神が必ずあなたを選び集め、そして死からよみがえらせ「神の国」の民とされるのだ、ということを知っていただきたい、信じていただきたいだけなのです。ですからどうか「神の国」に希望を置き、これを喜んでください。そしてご一緒に求めましょう「御国が来ますように」と、「主イエシュアよ、来てください。」と。